

## 日本における『社会主義下の人間の魂』

佐々木隆

プロローグ

オスカー・フィンガル・オフラーティ・ワイルド (O'Flaherty, Wills Wilde, 一八五四―一九〇〇) が没後一〇〇年を迎えたのは、西暦二〇〇〇年のことである。ワイルドは童話作家、劇作家、批評家、ジャーナリストとして多彩な才能を発揮した。ここでは、日本で最初に紹介されたワイルドの作品『社会主義下の人間の魂』に触れておきたい。

一 『社会主義下の人間の魂』

『社会主義下の人間の魂』は、明治二十四年(一八九二)二月に『フォートナイト・レビュー』(第四十九号)誌上に発表された。同年一月には『パデュー侯爵夫人』が『ギド・フェルランテ』のタイトルでニューヨークで三週間上演、四月に『ドリアン・グレイの肖像』の出版、五月に「虚言の衰退」、「ペン、ペンシル、毒薬」、「芸術家としての批評家」を収録した『意向集』の出版。七月に『アーサー・サヴィル卿の犯罪』、十一月には童話集『柘榴の家』が出版された。明治二十四年(一八九二)はワイルドが自身の芸

術論を発表した年ということになる。

社会主義の確立から生じる主な利点は、疑いなく、現状では、十中八、九までの人間をあれほどきびしく攻め立てるあの他人のために生きるといふさもしい必要からかわれわれを救ってくれるという事実である。(二)

で始まる『社会主義下の人間の魂』は、「新しい個人主義とは新しい異教主義」(三)で結ばれている。社会主義の確立から生じる利点から、新しい個人主義とは、「その目的とするところは歓びを通じて自己を表現する個人主義なのである」(三)と述べている。ワイルドは社会主義を論じながら、実は個人主義を論じていたことになる。

社会主義そのものはただそれが個人主義へと通じればこそ価値があるのである。(四)

ワイルドは単に社会主義や個人の芸術の根幹をナルシズム

を通して、個人と社会の関連を意識し、自己を完成させる新しい個人主義を理想郷として論じたのである。

## 二 「美術の個人主義」

明治十六年(一八八三)の *The Japan Punch* (三月号)で初めてワイルドは日本に紹介されたが、その後どういった経緯をたどったかはつきりしないが、早くも明治二十四年(一八九一)には増田藤之助によって『社会主義下の人間の魂』の一部が「美術の個人主義(ヲスカル、ワイルド氏論文抄譯)」(『自由』五月二十八日)として紹介された。しかし、「美術の個人主義」は原文の中程をほんのわずかに紹介したに過ぎない。『社会主義下の人間の魂』では社会的不平等の根源を私有財産制に求め、これを廃止ないし制限し、財産を社会的所有へと考える内容もあるが、増田は社会主義の描写ではなく、個人主義や芸術論の部分を取り上げたのである。政治的意図から「個人主義」に注目していたのであるが、ワイルドの芸術観をとらえることになっ

たのは見事であろう。当時の訳語の問題を考慮しても、その内容は十分に伝わるものと判断できる。この部分の翻訳を増田藤之助訳（明治二十四年）で紹介してみよう。

技術の作は特殊の性情の特殊の結果なり。其の美は作者が独自一己の面目を發揮するより来るも衆人が如何なる作を欲し如何なる物を望むかは回より其の關する所にあらず。（増田訳）<sup>(6)</sup>「技術の作」は a work of art の訳）

増田は個人主義と芸術観を論じている部分を見事に訳出している。

エピソード

『社会主義下の人間の魂』について触れるには近衛文麿（一八九一—一九四五）を避けては通れない。岡義武によれば、

近衛の自決後に秀麿は追想して、自分は兄から「社会主義談議」をよくきかされた。（中略）文麿のころ「社会主義談議」は恐らくはただその時のむら気によるものであろう。そして、その同じ気持ちの心の中に育まれた「社会に對する反抗心」つらなるものであろう。そして、その同じ気持ちが後に大学時代に彼を河上肇の許に出入させる一因にもなったのであろう。近衛はまた、京大在学中にオスカ・ワイルド（Oscar Wilde）の「社会主義の下における人間の魂」（The Soul of Man under Socialism）を訳し、それは第三次「新思潮」の大正三年五、六月号に連載されたが、この訳文も一因となって同誌五月号は発禁処分に付された。<sup>(7)</sup>

とある。細川隆元監修／矢部貞治『近衛文麿』でも、近衛の京大時代では西園寺公望（一八四九—一九四〇）に会ったこととオスカ・ワイルドの『社会主義下の人間の魂』を訳して発禁になったことを取り上げている。<sup>(8)</sup> 皇室と特

別の関係にある最高の貴族出身者が社会主義の思想に惹かれたということは近衛の運命的な生涯を象徴しているとも言える。近衛のワイルドへの関心は一過性のもものではなかったようだ。それは、近衛が自決する直前に読んでいたのが『獄中記』であつたと言う事実もわかっているだけに、近衛がただ単にこの時期に『社会主義下の人間の魂』を翻訳したと言う以上に、近衛の精神生活にも多大な影響を与えていたということも十分に考えられる。

『社会主義下の人間の魂』はワイルドの芸術論という以上に、日本に思想的にも大きな影響を与えた作品であつたと言えるのではないだろうか。

注

- (一) 西村孝次訳『社会主義下の人間の魂』(『オスカール・ワイルド全集』IV、青土社、一九八一年二月)、三〇六頁
- (二) 同書、三四七頁

(三) 同書、三四六頁

(四) 同書、三〇八頁

(六) 増田藤之助「美術の個人主義——フスカル・ワイルドの論文抄譯」(『自由』一八九一年五月二十八日)

(七) 岡義武『近衛文麿』(岩波書店、一九七二年六月)、八頁。

(八) 細川隆元監修／矢部貞治『近衛文麿』(日本宰相列伝⑮、時事通信社、一九八六年二月)、十三〜十四頁。

文芸誌〈アピエ〉12号

APIED

VOL.12



発行日 2008年3月3日

発行人 金城静穂

発行所 アピエ社

〒603-8063 京都市北区上賀茂今井河原町5-6

TEL/FAX 075-711-8716

印刷 (株) 中野新文社

[挿画] 村松桂 sumiko シシー

[ご購入案内]

〈アピエ〉 1部600円+送料80円

\*ご希望の方は下記郵便口座までお願いします。

郵便振替口座 00960-8-159533